総合型選抜　2024 年度過去問題　歴史遺産学科

Ⅰ　次の文を読み、あとの問いに答えなさい。

絵馬。元来は馬そのものを神に献ずることに始まる。この神馬、神々の怒りを鎮め、神威にあやかるべく神社に奉納され、そこで飼育され、祭礼に神が遷座（せんざ）されるべき馬であった。このような信仰の歴史は古く、『日本書紀』『常陸国風土記』など、神話の時代にすでに行なわれていた。この生きた馬から絵画や木彫り、土製の馬が代用されるようになったのは、平安後期から鎌倉期であるという。

ただ、蒔絵（まきえ）の絵馬は珍しい。奉納先は岩手県の成島八幡宮。奉納者は山城国（今の京都府南部）住人、木村肥前守国重。ときは天文二十二年（一五五三）正月。御宝殿に神馬一疋を奉納したのだ。

つまり、戦国時代の武将が神に真剣に祈って、奉納したものである。この木村肥前守という武将の歴史を私は知らない。しかも、なぜ彼が陸中国（りくちゅうのくに）（いまの岩手県・秋田県）成島八幡宮に絵馬を奉納したかはまったく闇だ。

そして、さらに永禄七年（一五六四）と元亀元年（一五七〇）、彼の子息と思われる木村景重が岩手県の中尊寺と福島県の田村神社に、同じく蒔絵の絵馬を献じている。同時代、東北地方という同地域に、同一族がこの珍しい蒔絵の絵馬を奉納しているのだ。この一連の関係から、なにかひとつの研究成果でも、とも思うのだが、いまだその手掛かりもつかんでいない。木村一族と東北地方の関係をご存知の方はご教示願いたい。

天文期の絵馬から三十余年。秀吉によって日本は統一され、近世が花開く。近世初頭、一世を風靡（ふうび）した高台寺蒔絵の技法と、この絵馬の技法は酷似する。鬣（たてがみ）・手綱（たづな）・蹄（ひづめ）や杭などに、針描（はりがき）という技法がつかわれていて、この針描技法は高台寺蒔絵独特のものなのだ。漆で絵を描き、金粉を蒔く。その直後、生乾きの金粉部分を針のようなものでひっかいて、線を描くというもの。また、馬の体部分は、本来ならば地蒔（じまき）に用いる梨地（なしじ）を用いている。これも絵梨地という高台寺蒔絵独特のもの。

このようにみると高台寺蒔絵は天文期までさかのぼると考えたほうがよい。この絵馬に蒔絵した工人は、木村氏が山城国の住人というから、京都の蒔絵師であろう。そして天文期の蒔絵とすると、かなり技術的には簡略化された蒔絵と考えねばならない。室町時代の蒔絵は高蒔絵（たかまきえ）を主流とした、こってりした蒔絵の時代であったからだ。

この簡略技法が近世初頭、その斬新な意匠とむすびついて高台寺蒔絵を生むのである。この絵馬はその走りといえるものだ。

さて、いま、全国の天満宮には入学祈願の絵馬が神木にたわわにかけられている。いかに超人類といわれようが、若者の心の奥には、苦しいときの神頼みという人間本来の信仰がまだ残っているようだ。かなりの遊び心の信仰といえなくもないのだが。

（出典：灰野昭郎『日本の意匠　蒔絵を愉しむ』岩波新書、岩波書店、一九九五年、一部振り仮名を補記した。）

問１　著者は絵馬について「生きた馬から絵画や木彫り、土製の馬が代用されるようになった」と記しています。人物や動物、植物、自然景観を含むものが題材あるいはモデルにされた文化財のなかで、あなたが興味をもっているものを１点あげ、その内容や特徴、興味をもった理由を 300 字以内で具体的に述べなさい（字数には句読点を含む）。

問２　著者は高台寺蒔絵のルーツを天文期の絵馬にみられる技法に求めており、蒔絵は日本の伝統技術として今日まで継承されている。このように時代を越えて継承されてきた文化財を未来へと残していくにあたり、課題となる点とその解決方法について、具体的な事例を示しながら、あなたの考えを 300 字以内で述べなさい（字数には句読点を含む）。

Ⅱ　わが国にはさまざまな時代・分野の歴史遺産があります。次の㋐～㋔の中から 1 つ選び、その魅力や興味深い点を、具体例をあげながら、200 字以内で述べなさい（字数には句読点を含む）。なお、回答した記号を必ず明記すること。

㋐遺跡
㋑埴輪
㋒仏像
㋓絵巻物
㋔近世以前の建築